

## 漱石先生、熊本へ

松山で教鞭をとっていた漱石は、熊本の第五高等学校教授になっていた親友菅虎雄に、「五高で使ってくれ」と手紙を送りました。

明治29(1896)年4月13日漱石は、五高の英語の教師として池田停車場(現JR上熊本駅)に降り立ちました。人力車に乗って新坂から、葉園町の菅虎雄宅へ向かう途中、眼下に広がる市街地を見て“森の都”と言ったと伝えられています。



画：中村 輝美

## 漱石の五高時代

漱石は五高英語科の教授として比較的平穏な学究生活を送りました。当時の五高には、校長中川元、教頭に桜井房記、英語科主任は佐久間信恭、同僚に生涯の友人菅虎雄、漱石の漢詩の添削をした長尾雨山がいました。

五高時代から漱石は「教師を辞めて単に文学的の生活を送りたいきなり換言すれば文学三昧にて消光したきなり」と正岡子規への手紙にしたためるなど、文学者としての道を考えていたようです。

教鞭を取るかわら俳句の指導者として、五高生たちと近代俳句の会『紫溟吟社』を結成しました。

明治30年10月10日の五高開校記念式典では、教員総代として「夫レ教育ハ建国ノ基礎ニシテ師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ…」という祝辞を読んでいます。



3列目右より2人目 漱石  
最後列左端 寺田寅彦

五高卒業写真(明治32年)

## 漱石先生の結婚

漱石は明治29(1896)年6月9日、「光琳寺の借家」で、貴族院書記官長・中根重一の長女鏡子と結婚式を挙げました。

列席したのは、新婦の父親、東京から連れて来た婆や、車夫など総勢6名で、ささやかな結婚式でした。

三々九度の盃が一つ足りないのも、新郎はいっこうに平気で、後に、夫人がそのことを話すと、漱石は「道理で俺たちは、けんかばかりしていたな」と笑ったといひます。

式の費用7円50銭也。



衣更へて  
京より嫁を貰ひけり

## 漱石先生父親となる



鏡子夫人と筆子

この家(内坪井田居)に移った頃、鏡子夫人は妊娠中でした。漱石は、ひどいつわりに悩まされていた鏡子夫人を必死に看護しながらこの年を送っています。

明治32(1899)年5月31日、熊本生活3年目に長女筆子が誕生。漱石は、その喜びを「安々と海鼠の如き子を生めり」と、少し照れながら詠んでいます。

鏡子夫人は「私は字が下手だから、せめてこの子は少し上手にしたいという、夏目の意見に従いまして『筆子』と命名いたしました」と述べています。現在、筆子が産湯を使った井戸が庭内に残っています。



漱石旧居庭園

## 漱石先生を慕った寺田寅彦

漱石の教え子であり、熱烈な漱石崇拜者であった寺田寅彦は、「物置きでもいいから是非とも書生においてほしい」と熱心に頼みこみましたが、馬丁小屋の中を見て、さすがの寅彦も住むことをあきらめたと言われています。

### 小説の素材となった くまもとの旅

漱石は、同僚山川信次郎などと金峰山麓小天温泉や阿蘇の旅をしています。

その体験から、小説『草枕』や『二百十日』を著し、自然派や西欧文学への批判、金持ちや明治期の近代化に対する憤りなど表現しています。



峠の茶屋



阿蘇の原野

## 文豪・漱石をしのぶ記念館

漱石夫妻は在熊中、この5番目の旧居が「一番いい家」であったと語っています。(敷地1,434㎡・建物232㎡)

この旧居全体を記念館とし、邸外には漱石の句碑や、長女筆子が生まれたときに産湯を使った井戸、寺田寅彦(のちに物理学者ですぐれた随筆家となる)ゆかりの馬丁小屋があり、展示室には漱石五高時代の写真、草枕絵巻等を多数展示しています。

この旧居は昭和53年4月25日熊本市指定史跡となっています。

### —— 夏目漱石について ——

漱石は本名を金之助といい慶応3(1867)年、江戸牛込馬場下横町に生まれました。幼少年時代、里子、養子と度重なる境遇の変化が漱石の性格形成に大きく影響したといわれています。

明治22(1889)年、正岡子規や菅虎雄、山川信次郎と知り合い、子規の詩文集『七紳集』の批評に初めて“漱石”の号を用いました。

東京帝国大学英文科を卒業し、東京高等師範学校と愛媛県松山の尋常中学校に勤務の後、明治29(1896)年4月13日、第五高等学校の英語の教師として熊本にやって来ました。

五高に4年3カ月勤務し、明治33年、文部省の命により英語研究のため2年間英国へ留学します。

明治36年帰国後一高と東大の講師をしながら、明治38年、高浜虚子の勧めで処女作『吾輩は猫である』を著し、その後『坊っちゃん』『草枕』などの秀作を発表しました。それらの作品をきっかけに朝日新聞社から熱烈な招聘の話があり、文学一本で暮らしたいと思っていた漱石は、明治40年4月、教職を退き同社に入社しました。その後『三四郎』『それから』『門』『こころ』『道草』などの作品を次々と発表し、国民的作家と呼ぶにふさわしい存在として、今もお多くの人々に読まれています。

明治とともに齢を重ねた漱石は、大正5(1916)年12月9日胃潰瘍のため49歳で死去しました。

## 参観案内

開館時間	午前9:30~午後4:30
休館日	月曜日(祝日の場合は翌日) 年末年始(12/29~1/3)
入館料	高校生以上200円・小中学生100円 (熊本市内の小中学生・65歳以上等は無料)
所在地	熊本市内坪井町4-22 TEL.(096)325-9127
所管	熊本市手取本町1-1 TEL.(096)328-2039 熊本市文化振興課
駐車場	有(6台程度)



市指定史跡

## 夏目漱石内坪井旧居



熊本市文化振興課

# 小説の道中を歩く「草枕」の旅・第1章 (全コース版)

明治29年、第五高等学校教師として熊本入りした夏目金之助先生。翌年の暮れも押迫った頃、正月をゆっくり過ごそうと、熊本市街から最も近い温泉場として賑わっていた小天温泉・前田案山子の別邸へやって来ました。

この旅が、小説「草枕」のモデルとなった、いわゆる「草枕の旅」というわけです。熊本市郊外から2つの峠を越えて前田家別邸まで、旧道筋に設定された「草枕」の道には、いたるところに往時の面影が残り、小説「草枕」の道中編(第1章、2章)が、到着後の前田家別邸では第3章からの本編が体感できます。

## ① 鎌研坂 (かまとぎざか)



熊本市の北西郊外、島崎の岳林寺を起点として設定された「草枕」の道。最初のポイント鎌研坂は金峰山への谷あいにある。最も往時の道の状態を保っている。

「山路を登りながら、こう考えた」。おなじみの冒頭の一文。その山路がこの鎌研坂あたりと思われる。

## ② 鳥越の茶屋跡 (とりごえのちゃやあと)



「おい」と声を掛けたが返事がない。軒下から奥をのぞくと煤けた障子が立ってきつてある。向こう側は見えない。

「草枕」より

「草枕」には峠の茶屋は一軒しか出てこないが、当時、熊本から小天への道中には、ここ鳥越(とりごえ)と野出(のいで)の二つの茶屋があったという。鎌研坂を抜けたところが鳥越の茶屋跡。井戸跡が面影を感じさせる。現県道との間には現代の茶屋が営まれ、往時の茶屋を復元した資料館も建つ。

## ③ 金峰山北麓 (きんぼうさんほくろく)



路は存外広くなって、且つ平らだから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぼたりぼたりと落ちる頃、五六間先きから、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらわれた。

「草枕」より

鳥越峠を過ぎ、金峰山の北の谷あいを歩くと趣のある竹林に出会う。この竹林のトンネル、入り口に立って奥をみつめると、作中のこの一節を感じさせる。

## ④ 石畳道 (いしだたみのみち)

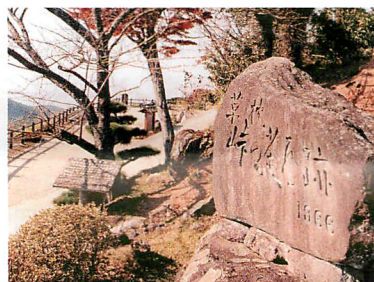


「草枕」の道の大半は、明治30年当時、熊本と高瀬(現在の玉名市)を結ぶ往環だった。別れ道には、往時をしのぼせる左野内、右野出の道標が立っていて興味深い。

追分を天水へ数十メートル先、県道から山あいに分け入ると中ほどから石畳が始まる。

ここは往時の面影を深く残しているところで、散策するファンに最も人気がある。薄暗く、苔むし、竹の落ち葉におおわれた石畳の中にたたずめば、いつしか世俗を忘れ、向こうから漱石先生が歩いて来るような錯覚さえ覚える。

## ⑤ 野出の茶屋跡 (のいでのちゃやあと)



ここまで来ると眼下に海が見える。右手に有明海と雲仙。左手に宇土半島を隔てて天草の遠望。

かつては、ここに隣接して茶屋が建っていた。

当時、小天からは馬に背負わせたみかんを熊本市新町の市場に出荷していた。朝まだ暗いうちに家を出、峠にさしかかるところ明るくなる。この茶屋には各戸が預けた提灯が軒先に並んでいたという。「〇〇さんもう行つとらすたい。△△家は今日を出ささんとだろか」といった会話が交わされていた。

二つの峠の茶屋。小天の人々には野出がより身近な存在だった。今は、幹線はむろん一般道からも離れ、行き交う人も少ない。

間もなく市境。那古井の里・小天は目前。

一山を越えて落ちつく先の、今宵の宿是那古井の温泉場だ。

「草枕」より

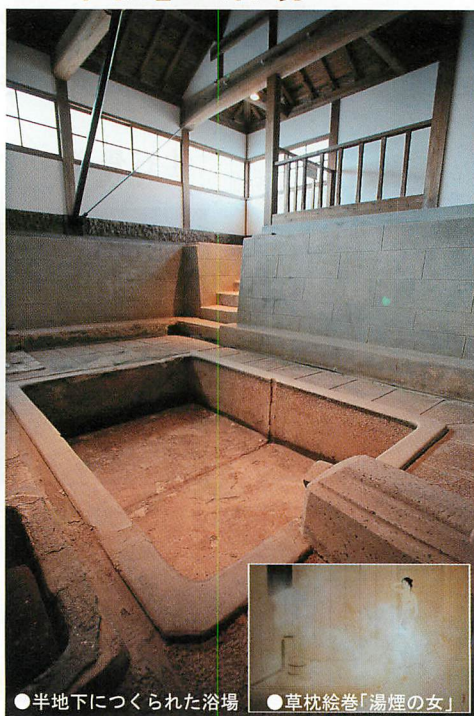
<方言> もう行つとらすたい=すでに出発している。  
出ささんとだろか=出荷しないのだろうか。



# 小説「草枕」の舞台 前田家別邸

夏目漱石の小説「草枕」は、熊本の名士前田案山子が来客をもてなすために趣を凝らして建てた別邸が舞台となっています。明治30年の大晦日、当時五高教授であった漱石がこの別邸を訪れ、逗留した数日間のできごとをもとに、明治39年、小説「草枕」を発表しています。

## 「草枕」の浴場



●半地下につくられた浴場



●草枕絵巻「湯煙の女」

## 漱石宿泊の「離れ」



●漱石が使った6畳の部屋

前田家別邸は、敷地の段差をいかした複雑な様相の屋敷で、小説ではこの別邸が「那古井の宿」、前田家が「志保田家」として登場。小天を「那古井」という架空の地名で表しています。「宿へ着いたのは夜の八時頃……。何だか回廊の様な所をしきりに引き廻されて、仕舞に六畳程の小さな座敷へ入れられた。」（第三章の最初）

主人公の「画工」が入浴していると、「広い風呂場を照らすものは、小さき釣り洋灯のみである……。何とも知れぬもの一段動いた時、余は女と二人、この風呂場の中に在る事を覚った。」とある幻想的な場面は、この浴場の構造が演出した漱石の実体験から描かれたものです。



●草枕絵巻「那古井の温泉場」



●現存する浴場と玄関

●CGで復元した前田家別邸の全容

## 漱石が魅せられた小天と「草枕」をひも解く「草枕」の歴史資料館・観光案内

# 草枕交流館



### 展示室と前田家別邸模型

資料や展示パネル等で「草枕」の背景、前田家の歴史を紹介。中江兆民、岸田俊子や孫文、黄興らの書のほか「草枕」の主舞台となった別邸の完全復元模型（山鹿灯笼師作）を展示。

■前田家別邸の資料館・案内所として設置。個人や団体の文学散歩・研修会などどうぞ！



### 映像ホール

「草枕」と小天・前田家との関わりを紹介する「草枕浪漫」(12分)を上映。文学歴史セミナーなども開かれる。



開館時間／9時～17時  
入館料／無料  
休館日／水曜日

## 草枕の旅

■小説「草枕」のモデルとなった夏目漱石の小天温泉への旅。漱石先生に習い2つの峠の茶屋跡、石畳を経て前田家別邸へ。この道中が小説に描かれた第1章、2章。前田家別邸に到着したら第3章からの物語の頁が開きます。

そばには明治創業の温泉宿「那古井館」、公共施設「草枕温泉てんすい」があり、入浴とお食事などができます。草枕温泉は前田家別邸をイメージした回廊づくりの建築。別邸の浴場を再現した「草枕の湯」につかれば、まさに漱石気分の日が満喫できます。

### ウォーキング ■2011～2012年の予定

#### ★小説「草枕」の旅・第1章

峠の茶屋公園⇒前田家別邸  
約12km・3.5時間

①11月3日(JR九州ウォーキング・上熊本駅)  
当日受付。上熊本駅前、8時から。随時シャトルバス送迎で峠の茶屋公園へ。帰路は草枕温泉から駅へ送迎。要バス賃500円。

②1月9日、③3月20日(いずれも草枕交流館)  
申込必要。各開催日の1か月前から受付。バスで峠の茶屋へ移動。参加料 500円。

#### ★みかんの花ミステリーウォーク

◎5月3日～5日(草枕温泉草枕山荘)  
当日9:30受付。無料。笠智衆(8km)と漱石(5km)コース。

## 会員募集 草枕ファン倶楽部

- 草枕交流館を拠点として、「草枕」の舞台である前田家別邸、鏡ヶ池などの保存活動や作品をとらえた歴史文化の学習研究、会員交流などを楽しみませんか。
- 入会金不要 ●年会費/普通会員 1,000円
- 特典/催事情報や会報送付、入会時にオリジナル便箋(漱石山房の原稿用紙)を贈呈。

### 主な事業

- ★草枕文学歴史セミナー  
テーマ/小説の原風景をたどる文学散歩
  - ★草枕史跡保存ボランティア活動
  - ☆研修旅行 ☆草枕ガーデンプロジェクト
- 事務局/草枕交流館

## ⑥「白壁の家」前田家本邸跡

(しらかべのいえ まえだけほんていあと)

※民間住宅地のため  
見学立入は不許可。



「草枕」の中に、「二丁程上ると、向こうに白壁の一構えが見える。蜜柑のなかの住居だと思う。——」と書かれているのが八久保の前田家本邸のこと。屋敷の様態は明らかではないが、「2階建ての母屋に2棟の茶室、新旧の蔵と黒門があったということ

と。新蔵には滔天から頼まれて外国人を住ませたことがあり、人が住めるようになっていたと聞いている」(案山子の曾孫談)という話から臆気な輪郭が浮かぶ。

「城下(熊本)まで他人の土地を踏まずとも行ける」というほど栄華を誇った前田家だが、長年にわたる政治活動のうえ、親兄弟のいさかいによる分裂騒動をきっかけに急激に衰退。明治34年12月24日夜の失火によって本邸は焼失。小天のシンボルともいえた「白壁の家」はついに再建できなかった。

## ⑦漱石画「わが墓」のモデル 前田家墓地

(そうせきが「わがはか」のモデル まえだけぼち)



有明海に浮かぶ雲仙と思われる中に一つの墓石を配した漱石の自筆画「わが墓」は、前田家墓地からの眺めがモデルといわれている。

「僕は帰ったらだれかと日本流の旅行がしてみたい。小天行きなど思い出す」とは、漱石がロンドンから、一緒に

小天に旅した五高時代の同僚・山川信次郎へ宛てた手紙。そのころ、英国留学中の漱石は心身共に苦しい状況にあったといい、そんな中で、日本での思い出として前田家別邸での数日が蘇ったのだろう。

帰国後、ほどなくして、この絵は描かれ、その後「草枕」も執筆している。それほど小天の記憶は鮮明だったのか。

小天はまさに、漱石にとって桃源郷だったのだろう。

## ⑧宮崎龍介の学び舎・八久保小学校跡

(みやざきりゅうすけのまなびや・はちくぼしょうがっこうあと)



旧八久保尋常小学校の跡。碑文は宮崎龍介筆。明治30年頃、ここに前田案山子の三女・ツチの長男・龍介が学んでいた。

荒尾の宮崎滔天に嫁いだツチは中国革命運動へ没頭し家庭を顧みない夫に代わり、石炭販売などで家計を支えていた。その際前田家を頼って預けられた龍

介はここで4年間学び、卒業証書を得、さらに隣町の伊倉高等小学校へと進んでいる。

その後、東京帝国大学へ進んだ龍介は、筑豊の石炭王伊藤伝右衛門の妻であった歌人柳原白蓮と知り合い、「大正のロマンス」で知られる恋愛の末結ばれている。

## ⑨日潮士・前田案山子の墓

(にっちょうし・まえだかがしのはか)



「草枕」の中で、『白い髭をむしゃむしゃと生やし』た『志保田』の隠居。このモデルが、第一回衆議院議員(明治23年)を引退し、別邸で隠居生活をしていた前田案山子である。

細川藩の槍指南であった案山子は、維新に際し、今後は

農村、農民を支援するという意味から田んぼのカカシを名のり、自由民権運動家となった。その功績の一つに、度重なる塩害に加えて明治政府が始めた課税措置等に苦しむ干拓地農民を救うために免税運動を行い、長い年月をかけ、50年間の免税を勝ち取っている。

案山子は、漱石が訪れた7年後の明治37年に亡くなったが、墓碑には貫いた信念を誇示するかのよう、贈られた“日潮士”の名が刻まれている。

## ⑩「鏡ヶ池」と前田家第二別邸

(かがみがいけとまえだけだいにべってい)

※民間住宅内のため  
見学立入は不許可。



漱石が泊まった前田家別邸に隣接し、いずれも当時は前田案山子の別邸であったこの庭池が「鏡が池」のモデルの原形である。

この屋敷には、一時、宮崎滔天の依頼で中国の革命家・黄興が匿われていた。この時

「村に侵入する得体の知れない人物(清朝の工作員)は村民が見張り、剣術家の行蔵、九二四郎(案山子の三男、四男)は護衛隊を指揮し、夜は自ら真剣を差して屋敷周りを巡回していた」と聞く。

「私が身を投げて浮いている所を——苦しんでいる所じゃないんです——やすやすと往生して浮いている所を——綺麗な画にかいて下さい」

「草枕」より

「鏡が池」をめぐる画工と那美の会話のこの部分を描いたのが『草枕絵巻』の中の「水の上のオフエリア」。そして、その元になった絵が英国の名画「オフィーリア」(ミレイ作)。映画「崖の上のポニョ」の原点ともなった絵だ。漱石は、英国で「オフィーリア」に出会い、小天の「鏡ヶ池」が甦り「草枕」で融合させたのではないだろうか。

絵は2点とも草枕交流館に複製を展示してある。

## ⑪小説「草枕」の主舞台「前田家別邸」

(しょうせつつかまぐらのしゅぶたい・まえだけべってい)



このコースのテーマ。「草枕」の旅の目的地。

漱石は、当時温泉宿であったこの屋敷で正月を過ごすため、大江村の家(熊本時代3番目の家・現熊本市新屋敷)から歩いて来た。

◎建物の全容は「草枕交流館」にある復元模型やビデオ映像で案内。

